

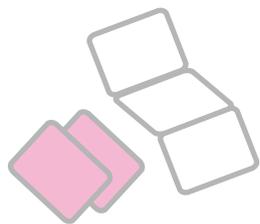
# 知っておきたいくすりの豆知識

3

薬剤部

## 散剤・水剤について

薬は用途に合わせ様々な剤形（薬の形）があります。中でも薬を口から摂取することで体内に取り込むことのできる内服薬は、最も汎用されている剤形です。前回の知っておきたい薬の豆知識では、内服薬の中から錠剤・カプセル剤についてご紹介しました。シリーズ3回目の今回は、散剤・水剤について詳しく取り上げていきたいと思えます。



散剤や水剤は、錠剤やカプセル剤を飲み込むことが難しい時にも飲みやすく、また年齢や体重によって薬の量を細かく調節できるため、お子さんや高齢の方が飲む機会の多い剤形です。

### 散剤

散剤は、薬の有効成分をそのまま、または添加剤を加えて粉末状にした、いわゆる粉薬です。散剤を粒状に加工したものは細粒、顆粒剤と呼ばれ、なかには胃では溶けず、腸で溶けるように設計された薬や、少しずつ薬が溶けて体内に吸収されるように設計することで効果を持続させるようにつくられているものもあります。小児用の散剤は、飲みやすいようにイチゴやオレ

ンジなど甘いコーティング剤で表面が覆われているものが一般的です。しかし、小さいお子さんの場合、薬そのものを嫌がってしまうこともあり、散剤をそのまま飲ませるのは難しいと思います。ここでは一般的な散剤の飲み方について少し触れたいと思います。まず1つ目の方法は、散剤を清潔な容器に移し、少量の水で溶いて、スプーンやスポイトで飲ませる方法です。ポイントの水の量が多すぎると、量が多くて飲み残してしまう場合があります。そのためだけ水の量は少量にすることです。2つ目は、散剤を水で練りペースト状にして、味の感じにくい頬の内側や上あごに塗りつけてあげる方法です。いずれの場合も、

時間が経つと薬剤の甘いコーティング剤がはがれて苦味が出てしまうため、まとめて溶かしたり、溶かした後長時間放置せず、内服する時間ごとに毎回溶いてあげるようにしてください。水では苦味が抑えられない場合には、味の濃い食べ物（例えばプリンやアイスなど）に混ぜてあげると薬の味が分かりにくくなり、飲みやすくなることもあります。授乳期のお子さんの場合、主食となるミルクに混ぜてしまうと、ミルク嫌いの原因となる可能性があるため避けるようにしましょう。また、1歳未満のお子さんの場合、はちみつも避ける必要があります。これは、はちみつにはボツリヌス菌という、人の体内に取り込

## 子どもが薬を嫌がる場合は

- ①少量の水でとかして飲ませる。またはペースト状にして頬や上あごに塗りつける。
- ②味の濃い食べ物（プリンやアイスなど）に混ぜてあげる。

\*牛乳は避けましょう。

\*1歳未満の子はハチミツは避けましょう。



お薬で、こまったことがあったら  
病院・薬局の薬剤師にご相談ください。



まれると毒素を産生する菌が含まれていることがあるためです。大人であれば、体の中の腸内細菌によってポツリヌス菌を排除することができるため害を及ぼしませんが、1歳未満のお子さんの場合、腸内細菌が未発達のためにポツリヌス菌が排除されず、体の中で増えて毒素を出し、様々な症状を引き起こす恐れがあるため注意が必要です。さらに、薬剤によってはジュースと混ぜるとかえって苦くなったり、薬の効果が落ちてしまうこともあります。お子さんが散剤を嫌がったり飲んでくれない際には、どうやって飲ませたら良いか、かかりつけ又はお近くの病院・薬局の薬剤師にご相談ください。



### 水剤

水剤は、糖類・甘味剤を含んだ、ややとろみをついた液状の薬剤です。最近では粉のまま飲んでも良いし、水に溶いてシロップ状にしても飲むことのできるドライシロップ剤と呼ばれる散・顆粒状の薬もあります。

水剤は、薬局では投薬瓶と呼ばれるプラスチック製のボトルに入れて、1回量を量り取ることのできるスポイトや計量カップを付けてお渡しするのが一般的です。飲む時には、ボトルに直接口をつけて飲んでしまうと、正しい量が飲めないだけでなく、カビなどの菌が繁殖してしまふ恐れがあるため、必ず添付のスポイトやカップを用いて指示された量を量り取って飲んで下さい。また、カビ等の繁殖を防ぐため、基本的には、しっかりとふたをして冷蔵庫で保管します。この際、お子さんや家族が

誤って飲んでしまわないように薬の袋にしまい、目に触れにくい所に保管して下さい。

今回は、散剤・水剤について紹介しましたが、これらの薬は似たような色・形をしているものが多く、錠剤に比べて識別が難しい剤形です。複数の散剤・水剤が処方された際には、どれが何の薬であるか分からなくならないように、薬剤名の書かれた薬の袋にそれぞれ分けて保管することが大切です。また、医師はその時々々の症状、体重・年齢に合わせて薬を処方します。処方された日数が過ぎた薬はとっておかず、捨てるようにしましょう。

次回は外用薬（塗り薬・貼り薬など）について知ってほしい知識や注意点を紹介します。

（担当：薬剤師 青木 美聡）